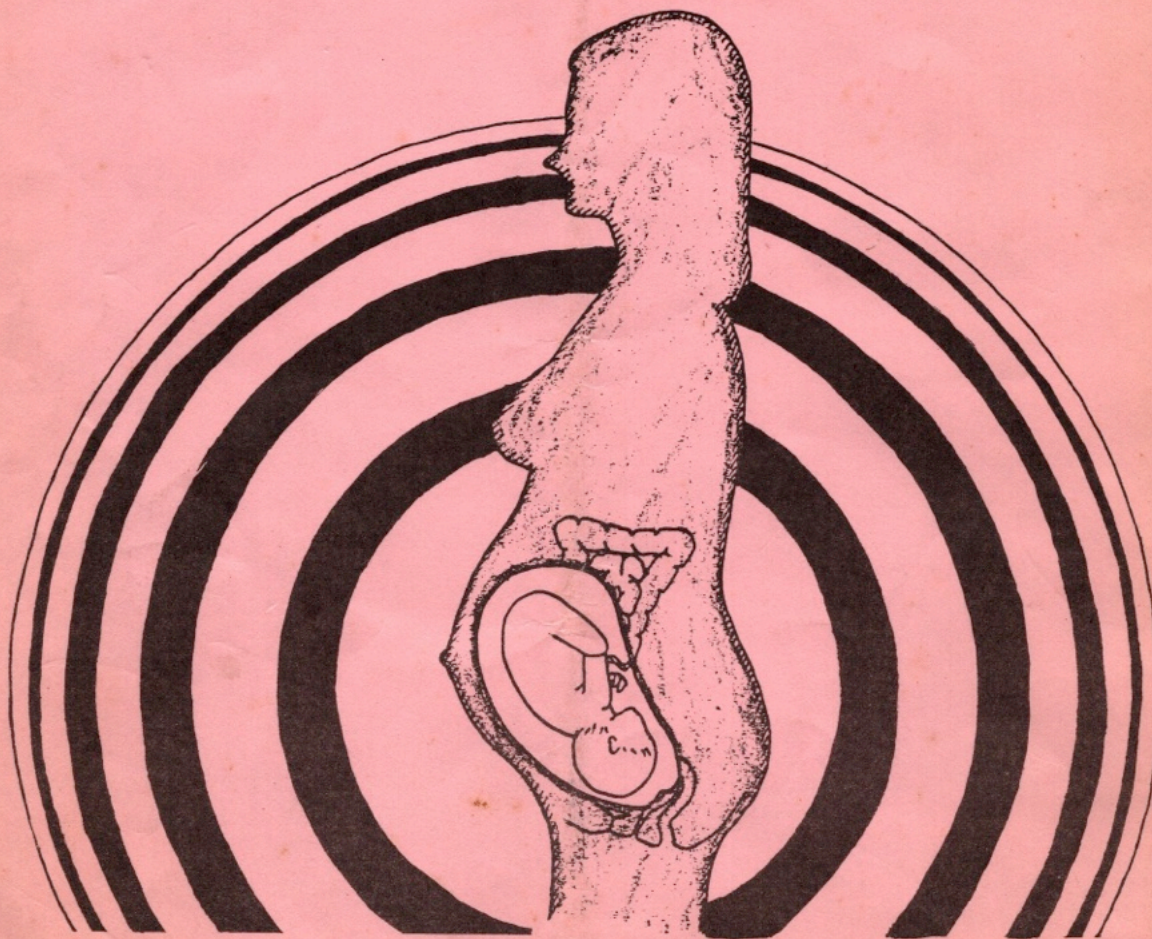


SSK

生きる会ニュース特別号

女性「障害者」の差別への怒り

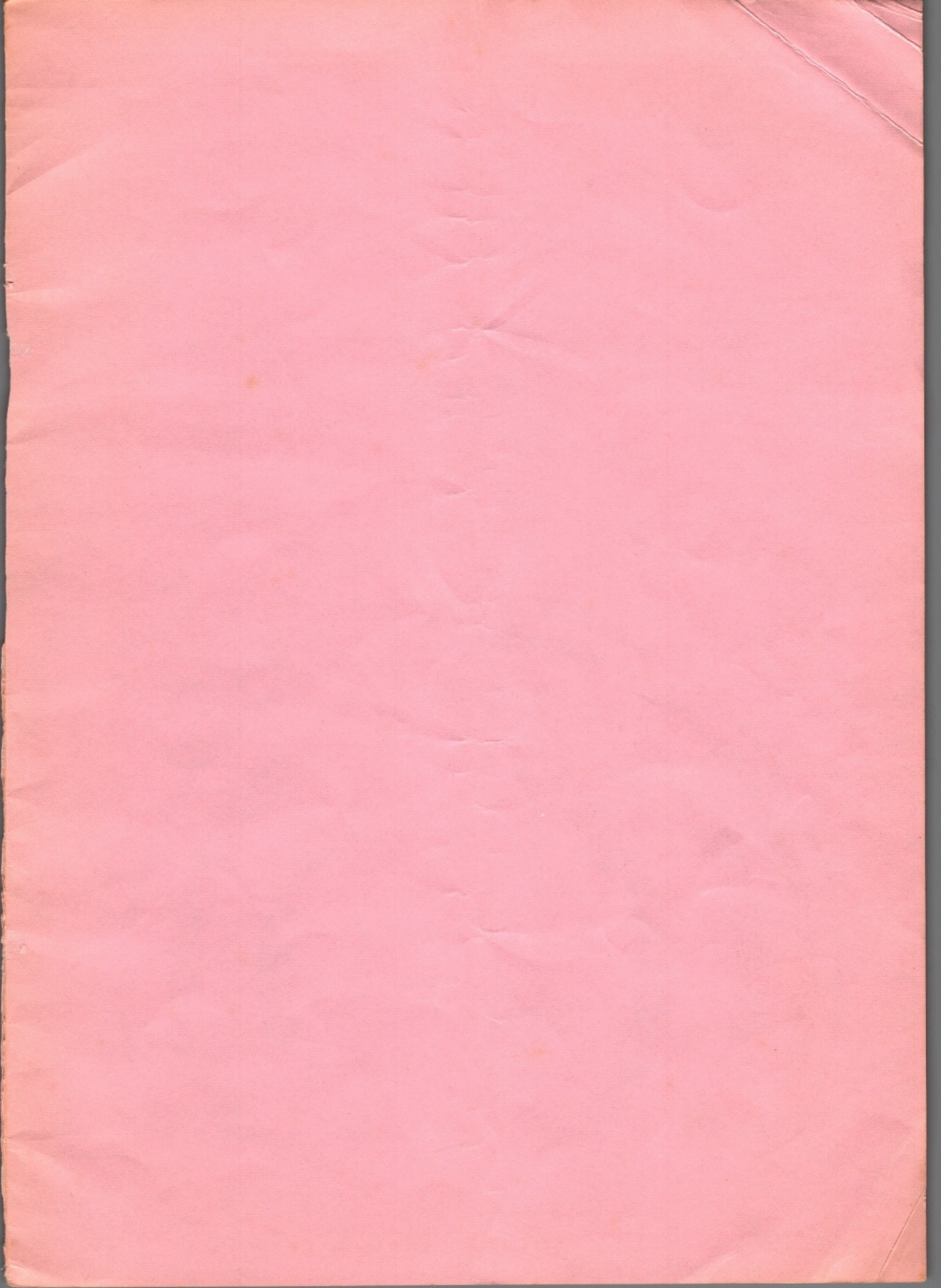
——子宮摘出手術——



「障害者」が地域で生きる会

SSK通巻1677号
昭和四十六年第三種郵便物認可
昭和六十三年五月二十五日（毎月六回、〇・五の日発行）

発行人
身体障害者団体定期刊行物協会
世田谷区砦8-21-3



「特集にあたって」

「生きる会」より

一九八一年十月九日、十日、大阪で「車椅子全国市民集会」が行なわれ、その中の女性問題分科会において、司会者（「障害者」）の介助者から「子宮摘出を法制化させよう」というレポートが出されました

トイレが自分ひとりでは困難な女性「障害者」にとって、生理のときは不断の何倍もの時間と手間がかかり、大変苦しいものです。一生介助を必要とする彼女らの中にはこうした現実と「健全者」の勤めに悩み抜いて、子宮摘出を余儀なくされた人が数多くいますし、今もその対応を迫られ、苦しんでいる多くの女性「障害者」がいます。女性問題分科会では子宮摘出は女性「障害者」の権利であり、自立することであると言い、間では金がかかるから、それを法制化し、自由に摘出できるようにすべきだと主張しています。しかし、考えてみて下さい。「障害者」の女性だけが、なぜ子宮を摘出しなければならぬのでしょうか。そこには、「健全者」の誤った論理があります。つまり「健全者」の手を煩わすのは悪い「障害者」で手がかからなくて、「健全者」の言うことをよく聞く「障害者」は良い「障害者」という「障害者」の人権を全く無視した考え方です。「障害」があるということは人権の大小に何ら関するものではないのです。

子宮摘出が法制化されれば摘出が女性「障害者」に強制されるのは目に見えています。

私たちは「車椅子全国市民集会」に出席した三井絹子さんの報告を学習し、法制化断固反対の声を上げていくことを開始しました。読者の皆さんもこの問題について一緒に考えていきませんか。

（文責H）



三井さんから「生きる会」へ

九月の末に、国立市で自立している三井絹子さんから手紙が届きました。彼女は重度「障害者」で「健全者」と結婚し、一人の子供の母親です。

手紙には、だいたい次の様なことが書いてありました。

二年程前から「子宮摘出を法制化せよ。」と運動している人がいます。その人は重度「障害者」で、「ヤミでやると金が高いし、危険である。生理があることにより「健全者」の迷惑になる。」という理由で運動しているのだそうです。このような意見が女性であり、「障害者」である者の立場からでてくることに、非常に問題を感じます。鈴木さんはどう考えますか？というものでした。

この「子宮摘出を法制化せよ」と運動している人とは森野和子さんという人です。彼女は、封建的な女性の意識に拘束された母親に、障害者としてでなく、四人姉弟の長女として育てられ、料理から裁縫、茶道、華道、手芸一般に至るまで厳しくしつけられ、「他人にはなるべく迷惑をかけない。自分のできることは自分でする。」という意識のもとで生活していたのだそうです。そんな中で生理時の負担は自身自身の苦痛だけで済まされるものではなかった訳で、結果、子宮摘出手術を受け、その過程で生じた「手術」そのものの問題「ヤミでやらざるを得ない状況、高額な費用など」が、法制化云々という発言になっていったようです。このことは彼女が結婚する時にも周囲の反対の中に、「あなたは女じゃないのに（子宮摘出したから）」等々の声に出合い、「子宮をとると、女でなくなるのか」という疑問を持つようになった。彼女が子宮摘出をしたことに関して、彼女

は後悔してはいないと断言していますが、このことは決して自然なことではなく、こんな風にしなければ障害者が生きていけないという社会には、確かに問題があると言っています。



「そよ風のように街に出よう」

(りぼん社発行) 一号より 編集部責任転載

「そよ風のように街に出よう」の中の「車イスひとりある記」より

森野和子さんが語っているものです。

へ齒に衣を着せぬ」思ったことをズバリ言うホンモノという形の紹介でタバコの話や自立の話をしています。

私らCPだったら、日なたにいても、板の間にいても、大したことにならないけれど、脊損の人が一時間、板の間に座っていたら、おそらく一週間後には入院よ。褥瘡（じよくそう）ができて、なかなか治らない。体形だけ見て、障害が重い、軽い、いつてたら障害をうりものにしていただけやないの。脊損の女性は、オシッコや月経の自覚がないから、お尻が常にタダれる。紙オムツが出来ていくらか楽になったけれど、取り替えるのに一時間位かかるから大変よ。

なぜ？ 手が使えても？

まず、車いすから、畳の部屋に移って、新しい紙オムツを車いすに敷いて、下着とって車いすに乗りかえて、トイレに行つて、便器に移って、少し出して、車いすに戻って、畳に戻って、きれいに拭いてデシカ粉つけて薬を塗って紙オムツ当てて、下着はいて、車いすに移る。この間、約一時間。もし途中でチョコボともれたら、またやり直し。これだけしていてもお尻がタダれて、外に出たくても出られない

人が多いのよ。それに生理があるでしょう、女性には。私の知っている女性、中年の人だけれどへ卵巣とって、メンスのないようにしてほしい」と、深刻に言っている。私はCPだけれど、日常生活がしやすくなるため、早くから卵巣とっている。お世話になったお医者さん、今はえらい人になったはるけど、名前は絶対に言われない。今は、法的に認められていないらしいから。彼女もそれで困っている。生理がなかったら、毎日の生活が、ずっと楽になるし、外出をしやすくなると思うけれどね。

こんなことが、九月に東京であった「第四回・車いす市民全国集会」の女性障害者問題分科会でもっと話し合われないとダメやと思う。全然出てこなかった。私が発言したら、みんなから総攻撃をくらった。私が「卵巣摘出手術を法的に認めよ。」と言ったからだと思ふけれど。

もう一つ、この大会で、私は総攻撃を受けた。「私は、愛やの、惚れたやの、そんなも

ので結婚したんやない。主人も私も、親が死んだあと、どうしたら生きていけるか考えて、生活のために結婚したんや。」と言ったら、「あなたの考えはまちがっています。」と言われた。主人は脊損やから性生活ができないけれど、私も知らないで生きてきた。経験している人が途中でできないようになったら深刻だと聞くけれど、私はどうってことない。これも私の言い方がまずかったと思うけれど、私たちはツンカしながらも結構、仲良くやっているものな。

これに関連して、障害者の出産の問題があるわ。全国大会では、重度の脳性マヒの人が、子供を生んだ映画があつてね。みんなはへあの障害で、よう産んだなあ」と、ほめちぎるのよね。自分で子供を育てられない人がほめられて、私みたいに卵巣を取ってしまった者は批難されるの、どうしてもおかしいわ。納得できない。その人たちは、施設はおかしい、養護学校はいかんと言っている。それなのに自分で育てられない子供を産んで、子供は社会のもの、地域の子だから、みんな育てたらいいと言う。そして、へどうしようもなくなったら施設だつてあると言つた。矛盾していると思うわ。



三井絹子さんからのレポート

これは、三井絹子さんが、森野さんが司会の女性障害者問題の分科会に出したレポートです。

おんなに、せいらがあつて、とうぜんのこと。二ねんまえの、この、しゅうかいで、しきゅうてきしゅつのもんだいがでた。しきゅうをとることをすすめているひとがいるとしり、びっくりした。それが、おんなのたちばかり、まして、しゅうがいしゃのたちはからだしてきたのでいいようのない、さみしさといかりをかんじた。なにゆえ、そんなばかなことをいいたのか。「ほうせいかをせよ」なんて、とんでもないことだ。いまでさえ、むりやりにとられているげんじつがあるのに、それを「ほうせい」などしたら、うむをいわず、とつてしまうことになる。おんなのしゅうがいじと、わかつたそのときから、とられるようになっていく。そういうことをかんがえたのだろうか。このしゅうかいのしきゅうかいである、もりのさんは「とつてすつきりしている」といつているが、あなたはそれでいい。なにも、ほかのひとにまで、おすすめることとはないとおもう。おさないこともや、わかいひとに、すすめるなんてまったく、きがない。にんげんの中からだには、なにひとつよぶんなものは、ついていない。それを「ひとにめいわくかける から」といつて、とつてしまふなんて、おかしいことです。「かいごをうけていきるのは、しゅうがいしゃの、えご、じぶんで、せわができないのに、こどもをうむのは、しゅうがいしゃの、えご」とい

われているそうですが、しゅうがいしゃという、じぶんのたちばをまつたく、ひていしたちばです。わたしは、できないところはてつだつてもらつて、いいとおもうのです。なにも、けんぜんしゃの、いいなりにいきることではないのです。せいらだけを、とくべつにする、けんぜんしゃは、かいごされるものきもちを、かんかえず、じぶんのいきかたに、はめていくにすぎません。めいわくをかけたくなないと、いつたら、うちも、おしつこも、とめてしまわねばならなくなりす。もりのさんも「ははおやが死んだら・・・ひとにせわになるのがいやだから・・・」と、けつかにとられてしまつたわけですが、それをじぶんのいしで、とつたといつていますが、じぶんのいしではなく、まわりのひとたちに、えんりよしてとつたにすぎないとおもいます。しゅうがいしゃだからといって、なんでそんなに、けんぜんしゃにえんりよせねばならないのですか。このんで、しゅうがいしゃになつたんじゃないんだからありのままのすがたを、みせていくしかないとおもいます。それをまわりのひとたちに、りかいしてもらい、てつだつてもらうしかないとおもいます。あるものをなくしてまで、ひとのいいなりに、わたしはいたくない。わたしもせいらのことで、しせつのしよくいんにわれたじきがある。なんで、そんなにべつしす

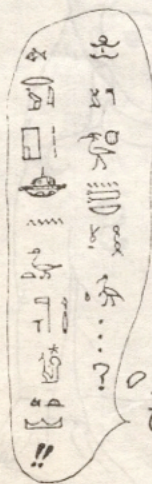
るのか、くやしがつたがどうしてもとるきにはなれなかつた。それは「おんななのに、あつてとうぜん」といういしきがつよくあり、それに、せいらはこどものいのちのあかしだから、いのちをつみとるようなこゝろはしたくはなかつた。いま、わたしはつくづく、しきゅうをとらなくてよかつたなど、おもつてゐる。こどももうまれ、うれしい喜びをすごしている。もちろん、いろんなひとにささえられてです。それを、えごだとおもいません。にんげんとしての、しぜんのこういだとおもっています。しきゅうてきしゅつをほうせいかしそれを、ゆうせいほごほうてきようしてもらいたいと、いつてるとききますが、もりのさんじしん、ゆうせいほごほうは、なんのためにあるのか、ほんとうにいつていて、そういつてゐるんですか。ゆうせいほごほうとは、しゅうがいしゃをまつさつするなにもでもないです。よ。それなのに、ほうせいとして、なんでわたしはしゅうがいしゃのみをまつてくれるとおもうんですか。あまりにも、あさはかなかさんがえだとおもいます。それとも、もりのさんは、しゅうがいしゃは、このよにいないほうがいいとおかんがえですか。せいらでなやんでいるひとがいるならば、すぐ「とつてしまえなんていわず、もつというゐるなやりかたやいきかたをばなしていくべきだとおもいます。わたしは、このしゅうかいにくるまえ、しきゅう

うをとらざるをえなかったひとと、はなしを
しました。ほうせいとか、しょうなんて、とんでも
ないと、いかっていました。きよう、このばに
きている、みなさんも、せいでやんでい
ひとがおられるとおもいますが、一じきなま
いで、しきゅうをとるようなことは、しないで
ほしいとおもうんです。このは四〇から五〇でも、い
つでもとれるんです。わかいうちに、まわりの
ひとにきがねをして、とってしまつて、としをま
したとき、こどもがほしいといつてもなくに
なけないとおもうんです。

もりさんは、じりつした、やりかただとまわ
りのひとから、しょうさんされているよう
ですが、わたしからみれば、おんなのだいじな
ものをひとのためにとり、それをじぶんでは
そうすることが、えらいようなかんかくにな
つており、じりつするためのじようけんの、
ひとつだと、うたつている。でも、それは、
わたしからみれば、まえにもいつたが、し
うがいしゃとしての、いわゆる、いきかたじ
やない。まわりのひとに、きがねをし、これ
なら、けんぜんしゃは、うけいれてくれるだ
ろうという、はかりにかけて、つねに、けん
ぜんしゃのかおいろをうかがっているような
ものだ。もりのさんのはっそうは、けんぜん
しゃ、そのものの、いしきだ。だから、こん
なだいもんだいをまきおこしている。しうがい
しゃから、このような、しきゅうてきしゅつ
をほうせいしてくれと、いいだしたら、せ
いふは、もともと、わたしたちを、じやまに
しているんだから、よろこんで、のつてくる。
しうがいしゃじしんから、しうがいしゃ

まつさつこうげきを、うちだすとは、いった
いどういうことなんですか。しにたければ、
ひとりで、しねばいいんです。なにも、ほか
のひとまで、さそうことはないのです。
しうがいしゃがいきっていくには、まだまだ
おおくの、こんなんが、あるけれど、けいど
じゅうどに、かかわらず、じぶんの、ありの
ままのすがたで、いきていき、そこで、りか
いをしていつてもらうしか、ありません。
けんげんは、みな、ひとりでは、いきていく
ことは、できないのです。たれかしらに、せ
わになるんです。
だから、しうがいしゃが、かいごをうける
のは、あるいみで、しぜんのこういとも、い
えるんです。
えごだとか、ひとのめいわくだとか、いわれ
ても、はねかえしていかれる、つよい、いし
でいきたいものです。
このしゅうかいも、そのためにあるのだと、
おもいます。
おわります。

つぎは
車イス市民大会レポートです。



字すうのかぞえまちがいで
こんなに空地ができてしま
いました・・・ごめんなさい。

第五回車イス市民全国集会報告

第五回、車イス市民全国集会が去る十月九日、十一日に開かれました。この中で「女性・障害者」の分科会でこの問題について話し合われましたので、以下報告します。

森野さんから、自分のおいたちと問題提起を受け、「子宮摘出手術の是非」をめぐる論議された。

「問題は是非にあるのではなく、発題者がそうせざるを得なかった時代背景にある思想の問題にしろはならない。」という提起があつた。この中で、一つには、「生理介護を受けることが、介護者にとっては迷惑である。」

というところをえ方をすれば、子宮摘出手術に行きつくしかない。生理を「いらぬもの」や「迷惑になる」ととらえることを討議していく中で、子宮摘出という自分の体を傷つけるという個人的努力による解決をはかるのではなく「しんどい」生理と向き合うのは自分の障害と向き合うのと同じだから「迷惑」と感じない人間関係を作ることが解決の方向ではないのか。問題なのは、そんな関係をいかにして作るかである。以上

この論議の最後に、森野さん自身から「もう二十年遅く生まれてこれたら・・・」という言葉があつたそうです。この彼女の言葉がどんなに討論しあつた「障害者」同志の心をホッとさせたことでしょう。「障害者」同志ということもあって、彼女らの葛藤はかなりのものであつたろうことは想像にかたく、森野さんにとっては子宮摘出を正当化せざるを得なかつたその生き様の中でくやしさを、反発そのほか云えずにきた社会的環境等を越えて、同じ「障害者」から反発を受けながら、この言葉がふと、彼女の口ついたのでなかつたかと思うのです。

私の青春をかえして



鈴木利子

私は一九七八年に施設を出て、自立生活をしています。施設の中では、恋愛・結婚・出産等、人間としてあたりまえの事を何もかもあきらめることを自分自身の中で正当化しようと努力してきました。しかし、同じ仲間である女性「障害者」達が、結婚したり、出産していく中で正当化しようとしたものが、打ち破られ、子宮摘出をされたことが、今、差別への怒りとなつています。女性が子供を産むということは、あたりまえの事なのに、とりわけ、重度女性「障害者」の出産になると、マスコミやまわりの人たちが特別のことのようにとりあげます。重度の女性「障害者」が出産することは、強い意志と勇気が必要だし、まわりの人との関係も、もう一度、作り直していかなくてはならないということもあつて、あたりまえのことなのに、

あたりまえの決意だけでは、できない社会があります。しかし、産んで、育てるといふ現実におこった状態を云々言うことはあつても、あたりまえの事をあたりまえにできない社会というもので、切り捨てられていく重度の女性「障害者」の問題は、語られず始末になつてきました。切り捨てられてきた一人として、今までタブーにさせられてきたことを語りたいと思います。

私は生理が始まったのは十四才の時でした。(ちよつとおそかつたかな。)みなさんは何才から始めました？ 牟令・性別は問いません。姉妹の末っ子だったので、なんとなく何かあるなあつて思つていました。お姉さんの生理の時によく脱し綿を一つずつくるんだのを覚えているのだ。施設に入つた時、母が包みをみせて「これは先生があげるまで、あけちゃだめだよ。」と荷物置場にしまいました。そんなこといわれて、見ないわけないじゃないねえ。生理用具だつたのですが、何だかわからないので、またしまいました。

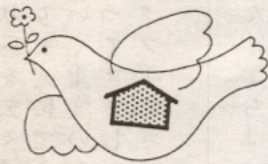
さて、十四才になつた私は(本当は「めでたく」のはず)「女の子ちゃん」になつたのです。ところが、保母さんや先生たちの一声は「利子ちゃんも始まつたの？」もう、こんなところだけ一人前なんだから」と、ま、こんな具合。私はその時なんぞこんなこと言われなきやならないのかわからなかつた。それからというものの便所は三十分以上かかるわ、雨の日に水たまりでころんだらパンプとナブキン、ベチャベチャドタドタ。「何でも訓練だから、自分でやりなさい。」と怒鳴られながら、ぞうきん、タオル、着替え、全部かかえてトイレに入つて一時間。はあーやつと落着いたと思いきや、すぐ洗たく、泣いてばかりいました。そんな毎日のなかで体の具合を悪くして半年ぐらい寝たきりになつた時、(私たちの様な脳性マヒ者は、何か精神的にまいつてしまうと、緊張

が強くなつて、動けない状態になることがあるんです。)看護婦さんがおむつをもつてきて、これが一番いいの。世話がかからなくて」と言われました。「いやだ、そんなの」と言うか言わないうちにオムツをさせられてしまいました。十六才の頃、母は私に子宮摘出を進めました。でも、なんだかよくわからないまま、「いやだ、そんなの」と言つたのでやめたらいいのですが、母は「お前自身が大変だし、これからもみんなに迷惑がかかるし。」と言つていました。そして、二十才をむかえる頃、一人の青年が私の前にあらわれたのです。なんと、この私めが大好きなカレーライスも、のどを通らなかつたのです。ところが、彼は施設をやめるとき、「ホームで生活している人たちは美しい。自分は何んておろかな人間なんだ。」と一年も奉仕で働いていたひとが、こういうことを言うんです。私は、ガーンと一発なぐられた気持ちでした。失恋の痛手もあり、私は色々悩みました。このまま施設で生きるしかないのだから、行き場もないし……・・。子宮摘出を受けることによつて何もかもあきらめがつくのではないかと思つたのです。

そして、自ら手術を受けてしまつたのです。手術の日腹を切られている間も先生とケンカしてました。ハッタリきかせていなきや、やりきれないですよ。私は、「障害者」としての認識なんてなかつたし、だから結婚やウェディングドレスに夢や希望をもつていました。でも、そんな夢や希望が音をたてて、まるで積木を一つずつ積んできたのに誰かにけとばされた様にくずれてゆく思いでした。今でも悔やしくて涙が出ちゃうんです。なんで年はいかない女の子が、女であることを自ら否定するようないかなことを考えなきゃいけないんですか。そんな私にまわりの人たちは「えらいね。みんなも、あんたのようだったからねえ」と誰も、他人の悲しさや悔やしさをなんて、気づかず、ほめるんですよね。それも同じ女

ですよ。

手術が失敗に終わってしまったため、私は医者から、男性ホルモン剤を四・五年の間、飲まされていました。「これを飲んでりやなくなるだろう。」と薬をくれました。私は、その薬をホルモン剤だと知ったのはずいっと後のことでした。医者は、施設の寮長から紹介されたのです。そして、薬を飲ませたのは施設の主治医でした。本当に許せない。そのため、私の声は変わってしまひ、男みたいにヒゲははえてくるし、そんなことで、みんなから「女じゃない」とか「子供が産めないんだって」とか言われたり、「あんな体で、その上、なんにもできないのに寮母さんにはむかつて」と言われ、私はノイローゼになり、自殺未遂までしてしまいました。自分でやると言ったことで——このことをみんなにあまりに言われたことで——このことをみんなに話すことも抵抗がありました。でも、みんなに話して、怒りを私の生きていくための武器に変えたいんです。今、はつきり言える。それは、何もかもあきらめさせられ、女であることを「迷惑がかかる」として、自らを否定させられてきた。「差別だ」と……。これからは、居直って、恋もするし、いい男がいれば（の話）結婚もしたい。ほれた男の子供がほしいと思ひしられれば、もっと強くなるでえ／きつと、私は／



寄稿

「私は子宮をとってしまったって後悔している」



猪野千代子

十四才の八月に、私は、初潮を迎え、その時親がはじめて、女のからだがかんなんものなを教えてくれた。何がどうなったのか全く知らなかった私は、平然としていたし、あまり深くは考えなかった。それから十五才になるまでは生理がなく、以後は二カ月おきとか、半年に一度という周期でしばらく続いた。二十才の頃、生理がないと乳房がはるといふよりは腰をもつようになり、生理が母がちゃんときてほしいと思つた。生理の処置はすべて血で倒れて、半身不随になつてしまひ、私のめんどうをみるのも大変になつた。それで、量の多い時は何度もトイレに通わなくてはならないが、それもがまんしてしまふと、腰や腹がいたくなり、つらかつた。妹や弟の嫁などいふにめんどうをみてもらうことも気がひけた。それでいふそのこと生理にならないように、子宮を取つてしま

うかと考えはじめた。そのことを母に打ちあけたところ子宮を取ってしまったと体調もくろし、からだがおかしくなるから、ということで強く反対された。母はどんなに苦勞しても私のめんどろをみると云った。だから私は強くも云えなくなり、同時に子宮をとってしまったと女でなくなるような気にさえた。二十九才の時、母が亡くなった。そのショックでか、生理が止まった。が、しばらくしてまた体調がもどり生理がきた。しかし、その時には、父がめんどろをみてくれた。「女は、こんなもがあるからめんどろだ」と云いながら・・・父が倒れたらということもあり、私は子宮をとりたいたいと民生委員に相談した。何度もその委員の人に本当にとつていいのかと念をおされた。三十才の時、とうとう子宮をとつたが、それからが大変だった。トイレがちかくなり、冷え症になり、更年期のような症状になり、ひどく体調をくずしてしまった。「トイレ」のことが気になり、ノイローゼ気味にもなった。私と同様に子宮をとつた人の話をきいたら、自分が無意識のうちに尿をもらしてしまふことがあると云っていた。私も排尿のあと少しそんな様子があり、それから五年間も、その状態がつづいた。ちゝ子宮をとらなければ、こんなこともなかったのになと後悔した。

府中療育センターに入所していたころ、友人が職員から「いのさんのように、子宮をとつたら」とすすめられていたので、私はその友人に「生理は一週間がまんすればいい、私のようにトイレがちかくなったりするから、やめた方がいい。」と反対した。そうこうするうち、まわりに結婚する人がでてきたりして、私は複雑な気持ちになった。かつて、いいなと思う男性がいたけれど、結局は、私には子宮がないというのとに、こだわりを感じて云いだせないままに終つてしまったこともあった。事実、私のことを子宮がないから女

ではないという人もいた。夢がくずれたという感じだった。

どんなに、苦しくても女としてあたりまえ、自然なことを、わざわざ自分から奪うことはないと思う。私としては、やはり、結婚して子供も産めたいなと思うことが、しばしばあった。しかし、今となつては居直つてこのまま生きてゆくしかない。

私の経験からしても、障害者の女性には、子宮をとつてしまふなどということは、やってほしくない。自分が子どもをそだてられないから、産んではいけないなどということは、おかしいことだと思ふ。人間として、女として、あたりまえの生きかたをすべきだ。障害者だから、子宮をとつてしまふという意見を拒めば、もつと女性にしたらどうかなどという意見があるが、とんでもないことだ。ありのままに生きることを拒めば、もつと女性に對して、差別が深まつてしまふのではないだろうか。



母親になって

藤崎翠子

「妊娠しています。よかったですね。おめでとうござ
います。」医師からそう言われた時、事の重要性におの
のき、うれしさよりも怖さの方が先だつて、どうしよう
か、産もうか、産むまいか毎日考えました。明日の介護
もしつかり決まっていな中で、どうして、新しい命な
ど産めよう。私たちは自分で選んだ道だから、どんなに
苦勞してもかまわないが、産まれてくる子供は何も知ら
ない間に苦勞の道に入つてしまします。それでいいのだ
ろうか。いや、よくない。やつぱりおろそう。しかし、
理屈ではおろす気になるのですが、実際におろす気には
どうしてもなれません。他人の話を聞くとばかば
かしく思うでしょうけれども、自分のお腹の中に生命が
宿っていると思うと、この命は大切にしなければなら
ない。何が何でも守りたい気持ちで働いたのです。
私は親や兄弟の大反対を押し切つて子供を産むこと
にしました。最終的に考えたことは、今おろしても子供は
死ぬ。産まれてから介護人が見つからずに死んだとして
も、初めから努力もしないで命を断つよりも出来るだけ
やつてみよう。それで結果はどうであつても、今殺すの
と同じだと思つて、思い切つて産むことを決意しました。
妊娠三か月頃でした。ト・ト・ト・トとすごい速く鼓
動してくれました。ト・ト・ト・トとすごい速く鼓
動しているのです。(赤ん坊が大きくなるに聴いた時、
鼓動は人並になるのです。始めてその音を聴いた時、
はつきり実感として私の腹の中で生きているんだと思
い、すごくうれしくて親の喜びを感じたのです。
私の場合、六・七カ月になつて障害者の為もあると思

いますが、赤ん坊によつて胃が圧迫され、食物が全然入
らなくなり、食べるともどすといつたことが産まれるま
で続きました。赤ん坊に栄養が保障できないため、二回
ほどテンテキのため入院しました。お腹は大きくなるし
物は入らないしで非常に苦しい毎日が続きました。その
苦しさの中でも新しい命が育っていると思うと、うれし
さがこみあげてくるのです。この実感は体験者にしかわ
からないと思います。
私も、十年間の施設生活で何回か子宮摘出手術を考え
た事もありました。障害者にとつて確かに生理は厄介な
ものです。でも、それをとつてしまつたら心蔵の鼓動を
聴く感動も新しい生命を宿している喜びも味わう事が
出来なくなるのです。
考えれば考えるほど子宮摘出手術は怖ろしいものだと思
います。障害者も弱気にならないで堂々と胸をはつて生
きようではありませんか。



いぬぐいじんせいなんていやだ！

わたしは せん^ん まも なく ある のうか に うまれたか やがて 森 (はつねつ) (かしようたい)に おちいったのて ちかく の (まち いしや)に
りようしん が しんさつ を うける へく さいを して きた そして (まち いしや)は しんさつを しだが けつかは はつきり せす きもんを
もちながらちも なつとく てきほいのて りようしんは おおきほ ひょういんへ わたしを づれて いうて しんさつを うけた ところ その けつか
のうせい しよ^ううに まひ と しん^ん された りようしん は かくせん と しわけど どうする ことも てきほいと わかつて いはがらちも あち こち
かけずり まわって けんめい に すこし ても よくほれは いい という おや ころろ て てきほ だけの ことは して くれて いたか どうせん ある ひ 二

わたしは せん^ん まも ぬく ある のうか に うまれたか やがて ❶ (はつなつ) (かしようたい)に おちいったの^て ちかく の (まち いしや)に
りようしん が しんさつ を うける ^へ さいを して きた そして (まち いしや)は しんさつを しだが けつかは はつきり せす きもんを
もちながらち ぬつとく ^て できぬいの^て りようしんは おおきき ひょういんへ わたしを づれて いうつ しんさつを うけた ところ その けつか
のうせい しよ^うに まひ と しん^ん された りようしん は かくせん と しむけど どうする ことも ^て できぬいと わかつて いぬがうちも あち こち
かけずり まわつて けんめい に すこし ^て も よくぬれは いい という おや ^て ころ ^て できる けいの ことは して くれて いたか どうせん ある ひ け

[illegible]

もえた (どうし) たらた それから しよつきに ちよくせつ かり を もつて いぬく (しよくし ほう) か はしまつた それは わたしに どうて みしめ と しつ
いぬい あらわす ことが できぬい とも こ (しせつ) と (いぬ) には そういう ほうほう て しよくしを して いるのだ ほんどうに いやう
もう こ (しせつ) の しよくいん に いぬは だまつた だへきせつ へける ものは いる には いるけど ほか には 「あまねちや ためよ だれの ためども
はい しよん の ため だかしやう と いつて じつと みて いて (て) を かそう とは して くれぬいのだ けつと また この (しせつ) は また いぬだ
(いぬ) に かえつて いるときは (せんぶん) しよん て しほけりぬは いやぬいぬて ある そうしほけりぬは どうにも ほんたうい ひどこと ぬはに 「つたつてよ
と いぬは かえつて くる ことは は けぬに いてるのか? あまねきつたさ あんた が かつた が うちかんだうに なるんよ じやう—— しよんて せんにや—— ために なるよ
いま とも いぬ がつて いる として また こ (しせつ) とも おほし ことを いぬける 「てきる けつ しよんて やつて がんばるうね それけつ しよんぬ
ものに なるんよ」と まだちや いぬけるのだ だから いくら (しよう しよう) しんどくても しほけりぬは いやぬいぬて そういう ことて (しよくし ほうほう) も
いぬく いう の ような かつた て かつて いるのだ いぬく いう しよんぬい ぬのら—— またの (ぬ) を ひらき ぬおけ しよんぬい と いぬすのて こそいぬすすてす はい

二
三
四
五
六
七
八
九
十



わたし　こ　ども　たたか　はじ　ねん
私と子供との闘いが始まって四年

かわのみちづこ
河上千鶴子

私は、現在三才半になる男の子の母親です。私は脳性マヒで重度と言われる障害者です。私が生まれて育った家は、小さい頃からしつけが厳しく、今から思うと親は障害を持つ娘だから人の前に出た時に恥をかきたくないと言う（親が、）気持からだだったと思います。そして、祖母と母親は私の将来について、よくこのようなことを言っていました。

「お前は、手が悪くてお嫁には行けないのだから、お兄さんの言う事を聞いて可愛がられるようにしなくちゃだめだよ。」と、私は、この言葉を幾度となく聞く中で大きくなるにつれて反発心が芽生えて来るのを実感していました。養護学校を卒業して就職して2回目の所で好きな人ができ、私は、夢中になりました。この頃から、私は、障害者解放運動を知り始め、地域で解放運動をしながら、恋愛し、結婚し、子供を産み育てている仲間の事を知りました。私も、子供が好きだし、好きな人がいて、それなりに付き合っていれば、私でも子供を産んで育てたいと思うようになりました。そして、付き合い始めてから5年目に、私は、初めての妊娠をしました。この時の相手の男は、産む事に反対し、差別発言をし、私とは、結婚は、しないと、私が、結婚が出来なければ、子を産むのをやめるとでも思ったのでしょうか。そして、私の家族はもちろん猛反対で父親なんかは泣いて「頼むから子供をおろしてくれ。お前なんかには子供が育てられるわけがない。」と言い、また、兄貴は「今お前の腹にいるのはまだ人間ではない。細胞分裂しているだけだ。」とも言いました。私は、こんな言葉を聞けば聞く程、中絶する気にはなれずに仲間を頼って富山から離れて子供を産もうとしましたが、疲労がたたってか、流産してしまいました。

この時に、受けた医療は、今思えばひどいものでした。富山県内の、小さな町にある個人病院に行きました。そこで、訳の解らない注射をうたれにかかりましたが、いやだと言う事で逃げるように帰って来たのです。それから、人に聞くと妊娠初期だったら、注射で流産させる事が出来ると聞

き、ゾーッとしました。私は、それまで、小さい頃から病院に通っていたので、お医者さんに対しては、不信感^{ふしんかん}は持っていなかったのですが、これ以来、信用出来なくなりました。富山^{とよやま}から、離れて掛かった病院は、前の所よりは、対応も良かったのですが、（前に仲間が出産していた。）少し、出血していたので、病院に連絡したら、安静に寝ていて何か、かたまりが出たら来なさいと言う事だったのです。考えれば、この指示は、間違っていたと思います。あんのじょう、一夜苦しんで流産してしまいました。もっと、知識があれば流産は防げたのかも知れません。やはり、背景にあったのは、障害者に対する予断と偏見、差別があり、未婚の母に対しての差別が強く現れていると思います。

それから、2年後に、2回目の妊娠を、しました。この時は、まだ、世間、一般の結婚はしていませんでしたが、相手の人と一緒に、子供を産み、育てて行くと言うことに話し合っていました。しかし、いざ、妊娠している事を私自身でわかった時、正直言って、うれしい気持ちもありましたが、そのことよりも前に、一度ひどい経験があるので恐怖感の方が強かったと覚えていてます。

まず、私の親が又猛反対するのではないかと、彼の親達には私と付き合っていることはしらせては有ったものの、彼が親の反対によって、退出するのではないかと、思い、又、病院に行くのが最も怖かったです。結局思い悩んだ末、前に掛った事のある個人病院に行きました。このお医者さんは、どういうわけか私達に対して予断や偏見を余り持っていなくて、いろいろ詳しく説明もしてくれるのでした。それから、この病院に通って行きました。

私の親と、彼の親が話し合うと聞き、私たちも、あわててその場に行き、妊娠している事を話しました。彼の親も、私の親も、顔色が変わり、一瞬沈黙、私の親は、私が考えていた程ではなく、面と向っての反対はしませんでした。心の底では認めてはいなかったのです。この事をそれから、2年後に明らかになりました。

彼の親たちは、私の、妊娠を知る前は、（一緒にやって行く事を話ても反対でしたが、）わかってからは、あきらめてくれたみたいでした。しかし、披露宴には、両方の父親は、姿を見せませんでした。反対していたからです。

それから、私とお腹の子との闘いが始まったのです。だから、あえて、こ

ぶんしに 4 年かん と、つけました。

それから、いわゆる結婚の事で悩みました。私が前の経験で未婚の母に
対して世間の目がもろ差別的に見て来ている中で、自分たちがやはり結婚
して行くのは、どうなのかと私の方が、こだわり続けています。今もです。
しかし、彼との話で、今、何を大切にして何に妥協するのかと言う事で、
今は子供を産み、育てて行く事が一番ではないかと言う事になり、籍を妊
娠 6 ヶ月位で入れました。

はじめて子供の心音を聞いた時はびっくりしました。まるで、カエルの
泣き声そっくりでした。とっともうれしかったのを、覚えています。私のお
腹がだんだん大きくなって行くのを、私に、関わりのない人達はどのよう
にみていたのでしょうか？私が、ちょうど冬にかけての妊娠だったからあ
まり目立たなかったのかもしれませんが、私は、もともと腹が出ているし、
誰も障害者が子供を産むなんて考えも、思いもしないでしょう。私は、な
るべく普通分娩で産みたいと言う事でお医者さんに言うと、万が一帝王切
開で産まなければならなかった時に、私の所では帝王切開の設備がない
ので総合病院を紹介します。と言われましたが、私は、その病院はいやだ
ったのです。そこで 2~3 件回り、一件でひどい発言を受けました。

それは、こんな内容です。「経済的に苦しいだろうし、育てて行けるか
ね、良い子が産まれないだろうに、他の先生は産めと言ったかね。」私は、
この言葉を聞いて、これ以上ここにいたらどうなるかわからないと、その
まま帰ってきました。この言葉を聞く前から、診察室に入り、医者の顔を
見た時から何だかいやな感じがしていたのです。この言葉こそ、私達を、
殺して行く優生思想そのものであり、障害者なんかに子供は産ませないと
言う事なのです。この発言をめぐって何かしようと思いましたが、何も証
拠がないのでしていません。

そして、9 ヶ月に入った頃に、妊娠中毒症にかかり、10 ヶ月に入って
から入院し、2 週間早く出産しました。病気の関係で帝王切開でする事に
決まり、手術の時に彼が障害者の仲間を立合わせてくれるように頼みまし
たが、結局だめでした。それで、麻酔を局部麻酔にしたら、赤ん坊が生ま
れたら、すぐに見せると言う条件で仕方なく納得しました。前に、仲間が
産んだ時にも、頼んだのですが、だめだったのです。生まれる日の朝、心
音が早くなり、急いで午後からやると言われ、心の準備もないままに何が
何やらわからないうちに手術のための準備が、進み、仲間が駆け付けてく

れた時には、部屋を出る時でした。手術をする前の麻酔をかける時になかなか注射が出来なくて、医者が私に「動かないで下さい。」と言うのでそんな事を言われれば、言われる程動くのにと、心の中で思いました。ようやく麻酔がかかり、アッと言う間に男の子が生まれました。へそのおが首に2回も巻ついていたということでした。私はうれしくて泣きそうになるのをこらえていたら血圧が急に上がりました。中毒症だったので体重が2500グラム以下だったら保育機に入れるとの事でしたが、ギリギリの2536グラムだったので入らずにすみました。

母乳が出初めても自分でやる事も、しぼる事も出来ないで、彼が介護者にしてもらいましたが、母乳をしぼる時の痛い事にはまいりました。赤ん坊がいなかったら、本当に病院から逃出したいと、何度も思い、又、痛いので何度か泣いてしまいました。私は、初めて手術をしたせいか緊張が続いて右の手がベッドの手すりを握ったままで、何か言おうとすると、腹に力が入り傷が痛み、医者に言っても解らないらしくて「みんなすこしくらいは痛いもんだ。」としか言いませんでした。

子供が生まれてから、今日までいろいろな事がありました。いくつか書いてみます。

子供が生まれてから、初めて富山県内にある遊園地仲間といっしょに行きました。私が、子供を車いすにすわり、抱いて歩いていると、向こうから2~3人のおばさんたちが歩いてきて、通りすぎたのに、また戻って来て私の抱いている子供をのぞき込まれました。私は、腹が立ちましたと同時に、私は、小さい頃から人にじろじろ見られてきたけれど、この子も、又、見られて大きくなるのかと思うと、複雑な思いになりました。話が前後しますが、病院で、先天性代謝異常の検査があり、私は、受けないと決めていました。私の親たちは、受けないで何かあったら親の責任だし、こどもがかわいそうだ。こどもにうらまれるぞ等と言いました。ある日の朝、婦長さんもやってきて検査を何故受けないのかと聞かれて、私たちの考えを言いました。「たとえ、障害が、あってもそのこが差別を受けないで生きていける社会にしていかなければならないのに、今の社会は障害があると差別を受けるのがわかっている。だから親たちもまわりの人達もその子がかわいそうだと思うねばならないんだ。」と言い、帰ってもらいました。

そして、こんな事もありました。子供のおむつをはずすためのオムツパ
ット？防水の掛ったパンツを買いに行ったら、私が使うのと間違えて大人
用のオムツ類がある売場に案内されて、私が、その相手に「違います。子供
のですよ。」と言っても解らない様子なので、何回か同じ事を言ったのち、
やっとわかったらしかったのです。富山では、めったに障害者を街で見か
ける事はなく、たまにみかけると、私たちの関係のある人なのです。まし
てや、子供を産んで育てているなんて思いもつかなかったのでしょうか。

そして、うれしいのと、同時にびっくりした事がありました。それは、
子供が、まだ、歩けないで言葉もよく話せない時期に、私と、大学に行っ
た時、目の前に階段があって車いすだから人がいないと上れませんので、
介護人が人を呼びに行った時、子供が、何か話ているのです。良く聞いて
みると「階段上るの手伝って下さい。」と、言っているではありませんか。
私は、ああこの子と、いつも一緒に外につれて歩いているから、階段の前
に来たら登れない事がわかってきたのかなと、思い、これから、この子
と、なるべく一緒に出掛けて障害者にとっていろいろ不便な所がある事を
覚えさせたいし、私が、人との対応で怒る事もあるので、なぜ、親が怒っ
ているのかも、知らせて行きたい等と考えました。

その事があってから、駅の階段の前に来ると、同じ言葉を言うようにな
りました。しかし、おかしい事に、私と介護人と子供だったら言うのです
が、私と彼とだったら、あまり言わないのです。彼とこの事で話をしまし
た。彼がいると子供は子供なりに、安心していいが、彼のいない時は
子供も緊張しているのではないかという話になりました。

そして、子供が1才6カ月の頃、私は二人目の子供を妊娠しました。産
んで行くということになるまで、色々ともめました。なんとか産むと、
決めてやって行こうとしていました。しかし、私の親は、「今の子供でも、
みんな彼に育ててもらっているのに、二人目なんかいらないだろうに。」
と、喜ぶどころか中絶を進めました。また、病院の医者も普通の人ならば、
妊娠しているとわかれば「おめでたです。」というと思いますが、その言
葉は、聞かれずに、「育てて行けるのかね。旦那はどう言っている。産ん
でも育てれなかったら困るから、なんだったら早めに来なさい。いいよう
にしてあげるから。」と、言いました。私は、腹ただしさが込み上げてき
ました。しかし、ここでけんかをしてはじまらない、産んで育てて行く
中でわかっていくだろう。と思いました。

そして、8カ月の時に、また、妊娠中毒症が出て入院していましたが、私の知識のなさ、看護婦のいいかげんさに、よって「早期胎盤剥離」によってお原の中で子供が死んでしまいました。この時の看護婦のいいかげんな処置を訴えれば訴えれたかも知れませんが、子供は、帰ってきません。それに、その時は、そこまで頭がまわりませんでした。かなしくてかなしくてたまりませんでしたから。でも、あれから、1年半過ぎた今も納得のいかない気持ちでいっぱいです。入院中に、また、あの婦長がやってきて私に、避妊の方法を言い「卵管をしぼる事」それを遅めるのでした。私は、腹が立って「何故、女がそんな事をしなければならないのか。男の人にも出来るし、どちらを選ぶかは二人の問題であって一方的に女が、しなければならぬというのはいかしくないか。」と、言う。「女は、子供を産むんだから女がしなくちゃいけないのよ。子供を産めないのがあなたの方だし、旦那さんは悪くないんだから、悪い方が責任あるのよ。」と言いました。この言葉、みなさんはどう思われますか？私は、この言葉の持っている意味は女性差別であり、又、悪い者に責任があるという発想は障害者差別だと思います。そして、私の親は、私がもしかしたら手遅れで死んでしまうかも知れないという時にも病院に姿を現わしませんでした。それどころか子供の葬式にも来なかったのです。このことを後で聞いた私は、もうこちらから縁を、切ろうと思えばそれ以来連絡をしていません。

それから、しばらくは家に帰ってから死んだ子供の事ばかり考えて過ごしていました。上の子供が、保育所に通うようになり、保育所との話し合いを持ちながら今まで来ています。たとえば、運動会の事です、普通は障害を持っている親がいたらたいてい親子のゲームがあっても、なかなか出ないと、思うし、送り、迎えだって毎日行かないと思います。しかし、私は、それを積極的にやって行く事からしか、はじまらないと考えてやってきました。（ただ、冬の間に雪が降り、車いすが動かなくなっている間は行けませんが、）それをして行く中で他の子供が少しでも、私たちの存在を見ていき、興味を持ってくれば良いと思います。興味を持つと言う事は、決して悪い事とはいえません。現に私が通って行く中で何人かの子が初めは私の真似をしていましたが、次にはいろいろわからない点を聞いて来るようになりました。興味を持っている子の方が話をするきっかけになるからです。私の子供が、ある日、「おかあさんで行くのいやだ。おかあさん電動で行って、僕車いすで行きたい、」と、突然言い出した事があり

した。私は、その時に、何故、わざわざ車いすに子供が乗り、私が電動で
行かなければならないのかと腹ただしい思いが込み上げてきました。彼が
いっしょに行こうと言っても聞きませんでした。ついにこの時が、来たん
だと思い、戸惑いました。子供を産む前からこのような時がいつかくる事
はわかっていたし、子供に嫌われる事は承知していたのです。私は、「あ
んたが、おかあさんをいやだと言おうが嫌いであろうが、あんたのおかあ
さんは一人しかいないんだよ。」と、言い切り、いやがっても今まで通り
についていきました。保育所に通っていてやはり、思うのは親なり、保母
さんから、ごく自然に何何が出来ることが良いことなんだとか、早く、きれ
いにするのが良いのだという事を教え込まれて来るのがよくわかります。
それが、行きつく所は、障害者は、だめなんだ。自分たちと違った者を排
除し、差別する事につながって行くのだと思います。

まだ、子供が小さいのでそんなに、大きな問題は出てきていませんが、
これから、大きくなるにつれて問題が出て来ると思います。富山でも子供
を持っていない仲間も含めて、問題にして行けたらと思い、又、他に一人
子供を産み育てている仲間がいます。お互いに悩み、問題等、話あって解
決して行きたいと思っています。

私が、今まで育てて来て思うのは、確かに子供は、自分の面倒を良くみ
てくれる人、彼、介護人等に良くなつきます。初めの頃はよくその事で、
彼と言ひ合いになり、けんかもよくしましたが、今は、自己満足がもしれ
ませんが、子供は子供なりに、私の存在を無視し切っていないんだと思
います。これから先、本当に子供とのけんかが始まると思います。障害者の
母親と、健全児の子供との闘いが、...



生きる会のまとめ

女性「障害者」の子宮摘出手術について「生きる会」で学習がもたれました。

女性「障害者」からのレポートをまとめてみますと次のようになります。

(一) 事の起こり

「障害者」である森野さんは、生理のとてつもないうとましさのために、尽いに子宮摘出に踏み切り、生理がなくなると、生活はずっと楽になった。

そして、森野さんは子宮摘出を危険で金のかかるヤミの手術ではなく、法制化させ、誰でも安全に手術が受けられるようにすることこそ女性「障害者」の自立に不可欠であると考え、そのレポートが十月の「全国車椅子市民集会」に出されるに至る。

(二) 女性「障害者」が子宮摘出に追いこまれてゆく背景

イ、「障害者」は「劣悪な者」「この世にあってはならない者」であり、「障害者」が妊娠して、また「障害者」が生まれてはいけない、だから「障害者」には子を産むための器官など必要ない、という優生思想が根強く存在している。

ロ、本来は地域社会の中で公的に保障されていなければならぬ「障害者」の日常的介助が現在ほとんどなされておらず、重度「障害者」は家族に介助してもらいか収容施設に行くしかない。そんな中で年老いた親に苦勞をかけている、という精神的負担を少しでも軽くするためや、施設側の強制のため、子宮摘出を選択してしまう。

ハ、「障害者」自身が、教育を受ける権利や社会性を身につける場を奪われており、自分のからだのしくみやたらしきなどに関する正確な情報を得る機会が「健全者」以上に与えられていない。そのため、生理をただめんどろなもの、と思わされたり、何をされるのかはつきりわからないまま、手術することを承諾してしまったりする。

ニ、

「健全者」の女性も無意識に受け入れている、女性差別に満ちた今の社会が要求する女性像（容姿がかわいい、男に奉仕できる等）にあてはまらない女性「障害者」は自分にとって妊娠、出産は無理なこと、と思いこまされ、その結果あきらめさせられてしまう。

(三) 子宮摘出手術の法制化に反対する理由

イ、摘出はいつでもできるが、してしまえば後で子供が欲しいと思っても手遅れ。

ロ、摘出の後、更年期症状で悩まされる。

ハ、「子宮がないと女でない」という意識にこだわり結婚から離れてしまう。ありのままに生きることが拒めば、女性差別「障害者」差別を増々深めてしまう。

ニ、摘出することは自ら女であること、「障害者」である

ことを否定することである。
ホ、法制化したら女性「障害児」とわかつたときから子宮をとられてしまう危険がある。
へ、優性保護法を認めることになる。

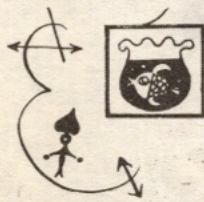
その後、レポーターから①法制化は優性保護法「障害者」差別を肯定し、「障害者」抹殺の危険性がある。更に保安処分肯定にもつながる。②「障害者」のおかれては厳しい状況を明らかにすることが必要。③労組が右傾化する中で、組合は妊娠差別の問題をなかなかとりあげようとしないう等、という問題が上げられ、それを受けて、全体での討論に入りました。

子宮摘出は来春国会に上提されようとしている保安処分新設策動とあいまって、すぐにでも法制化されそうだと、こののが参加者全体の意識でしたが、労組戦線にこの問題を提起すべきであるが、右翼労戦再編が進む現在、労組がこれを闘うのは難しいという意見が出され、それに対し、労働運動としてとらえるのも大事だが、その前に自分の生活として、生理や、子宮のない女性をどう思うかなどを語ってほしいという意見も出ました。それに、ついで、男性から職場で身近にある女性差別の闘いを支援することからしか自分の差別性を克服することはできない。との発言がありました。更に自分自身の性差別を問う必要性の鋭い指摘があったように、単に法制化反対と言っても自らの差別意識が問われる根源的な問題にぶつきあたり、十分論議が掘り下げられないまま、時間となつてしまいました。しかし、そういつた中でも、子宮摘出法制化に反対する闘いを継続していくことが確認されたと思います。

編集後記

女性「障害者」は、七人の原稿からわかるように、女性「障害者」がゆえに二重差別を受けてきました。施設の年に一回の旅行も、生理にぶつかれば行くことはできません。また、外に出ればトイレなど男性よりは手間がかかるといふ事で男性「障害者」よりも出る機会が失なわれていきます。そして、生理時、タンポンを使う場合には本人さえ使った事がない介助者にタンポンを入れてもらわなければならぬわけですね。まだまだ、様々な問題があります。生きる会ニュース特別号をもとに学園、職場で「障害者」問題の学習の資料にしていただけならうれしく思います。

今後とも、生きる会ニュースをよろしく願います。



改訂版に、あたって

現在の森野さんは？

「手術については、どうこう言われることも、言うこともありません。」

法制化については、今も考えています。」とお考えです。みなさんはどうお考えですか！

八一年に子宮摘出手術パンフを発行させていただき、たいへん反響をよんだものと自負しております。

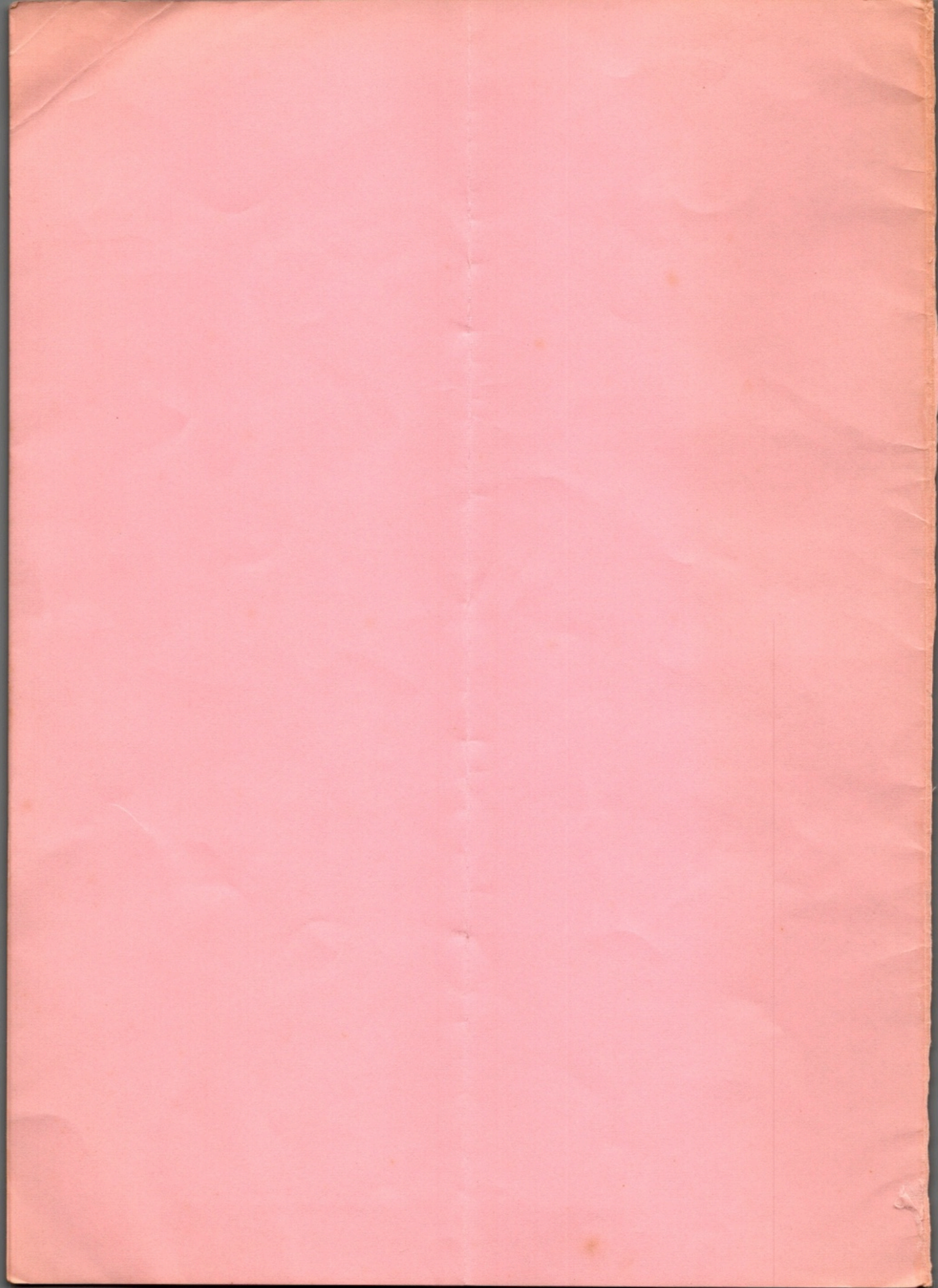
当時以降さまざまな「障害者」と知り合いました。

子を生み育てに日夜闘い子供と共にがんばっていました。しゃる「障害者」もふえてきています。

けれどもまだまだ施設や家の中に閉じ込められ、性の問題などタブー視され子宮摘出手術を余儀なくされつづけ、しんどい思いをさせられている「障害者」達が散在していることを、ここに改めて提起していきたいと思ひます。

私達生きる会は、こういった女性「障害者」の問題を幅広く取り組んで行きたいと考えています。今後とも皆さんのご支援ご協力をお願いいたします。





SSK通巻1677号

昭和四十六年第三種郵便物認可
昭和六十三年五月二十五日（毎月六回、〇・五の日発行）

発行 昭和六十三年六月一日

「障害者」が地域で生きる会

千葉市稲毛三の十六の二

鈴木 気 付

TEL 〇四七二―四六―八五九三
カンバ ニ〇〇円以上

発行人

身体障害者団体定期刊行物協会
世田谷区砦8―21―3